へ9
3869
39

三種尺初篇 全

67
60
特へ利9
3869
39

三種尺初篇 全

特へ利9
3869
39

特
帝国図書館
3869
39
大正七年十二月
室井平蔵氏寄贈

爲小姓一當ら小姓を召すに味を
いつれも五十五日を限りとぞう
けるこゝよりあら人和歌こゝ乃小
はたの應弱を行り且
五方の所々城あり川めく
李朝の判者を浪華の
二斗一度下物つゝし者り
子ゞ能詩いちこゝをうゝく浪
花小一人の名はなるゆゑく
学のおこゝ所也さる代友人

書畫常書律格
[illegible]
[illegible]に辞をゆづりて其
事を書るとかや

題次列 但下字子糸業

て 祝
[illegible]
春 [illegible]
夏 節
[illegible]の間
[illegible]云
一生
[illegible]
おと[illegible]

毎年
此赤例
[illegible]事
[illegible]さ
ねん比
一チ言
[illegible]
法 [illegible]
[illegible]

雜事

妹　兄姫

老さう至　兄弟

母　親　はつの咲

ちゝめの　今年若

行ゑさ事　娘　事

在ゝ　高　白　狀

ちゝのし　女　房

事ゝ志野　よろこひ

ふこ〳〵　事ゝこの方

はぐやう

ふる日和　雨

ゝの中　事

一　ん　年

真　実　本ん

へいぜい　幸　抱

是　ゝ　源　ん

ちゝ立　へんん

潔　ん　片至地

ちゝ立　かんゝん

ゝ　ゝ　相　詰

丁　内　汝　活

いけるす事
形まを
おもしろ
女 事
支へ
りゆうあん
ゐひ切り
親 達ち
我とも

ぬす人
をうく
れそうし
ゆうを
如 うう
妻さま
今一云
去り状
わさぐし
かんざし

題二

かうさ
姿 見
入ほう
叶ふ事
人 形
片 云
風を雪
介 抱
神とも
拵 別

横 樞
見 臺
す事さ
撫り人
敲 足
文 育
かり火
四
梶が葉
いんきん

いっさん
仲人
嫁入り
たまくし
大名
抱さる
沢山
商売
こんにゃく
織り人

役立
結納
いそくし
思ひ出
生命
ちんちき
伊達者
ちゃら
今さら
仰ヵ様

つづら
つまの手
海ぬ手
仏中
なんと
屋人

徳母
姑
なんの
内さ
ゆり人
ろんさ
梅ヶ香
うさぎ
校井戸
交出

言
言
縫状
受出

物語
野辺送り
長閑さ
哀
来ル 交
やうく
弱 来
義 入
けうく
待 壹
居戦り
春 嗜
くうぐう
のりもの
来ル 人
きうあ
まちうひ
敦 方
待 兼
壹 原

目さえ
又〳〵
頁ケうく居
頌 珠
壹の日
うりうう
うれしさ 扱
姿 見
茶 宇
一生
生 赤
いふ云
げんぶく
山 吹
ふんど〳〵
年 元
こし元
意 巾
時 函
長命

ありかさひ
西舎り
尼寺
踊りる
高地の付
ちるく
ほとゝぎす
淋しさ
涼しさ
涼臺

あぶなさ
西左
秋風
語り
一門
川と雲
五月雨
誘人
漁翁
夕立

時流り
名物
せん別
世渡り
順礼
杖笠
をカをを
いさ記ん
神志田
正直

杖巻り火
名物
尽連
無試撫
回り
尽中
撫く
反り撫
神ゝ勢
鈴宮寺

修行者　名倍
分別　小瘡治
人事　立身
果報さ　射まう
もれしる　人掛
白妙垢　せんぐ
関寺　関の戸
ひろく　君ゐ代
おさまり　めてたい
祝言

三種尺初篇

浪花　椎本下物撰

いさぐ　ふんどしの舟橋の掛けゆき
ヲシ　桶伏せとまバ山亜子所
踊りまを　ゑらーて見る老女姫
リカ　梳洗く布巾を入るゑ牡ろ
オフ　思ひ切るまを老るでもなし
名倍の机ふ毋乃らうこ状
涙さを曲輪の廓も捨てるまを

ヨカ　男鶴りと聞りあ丸者東
思ひ切だうり酣なさ鶴く立
一ッ乃ゝゝ中る而小春ノちり
ニニラ　まこゝ後も失表臥八常とぞ
を手へ突たを妻孔深遠ひ
ゝそ手の時るでも色猿小契
主地の付日ゝ高小今一嘆
時るゝそゝひるゝしゝ乃彰へ契
ワト　あゝのと夫をゝ八ゝざぬ代
ケマ　源氏又と女するどん而ゞある

ニヨ　絶母ゝぶゝち鳴り又ゝし
ヰフ　春ゝす家ゝ小女房八老初ろ
ヨイ　日小ふゝゆゝふ流める云年
本妻八州の名を問ふゝ子の
ヨン　抗ゝへ女孔放ぞ辛傷する
ナト　仲居ゝゝひとゝる本猫
可ゝゝも拾ゝを夫の美小触
抱ゝ子乃影級八人ゝひふゝひ
女妻の夏ゝ孔ゝ菜を拭ふ
入療母し既ゝ至ゝ療のゝ

時おるや　ホイをちるふうて　色情

カタチ　隠さるこゝをハ　女ハ　力ぐゝと

イヲト　そハ　猪と　女の方ゝと　泣く　泣く

夫へ　そハ　ハ　ハ　ハ　ハ　出ぬ　出ぬ　業く

時よそう　麻　今　くすもぬ　ぬ　ぐうけ

臭　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　なし　泣　ぐう

本妻ハ　後ゲ　立ど　も　姑　来す　紀

踊りの　何ドや　呼く　脊ゲ　抱ひ

待　ど　ド　ド　ド　ド　ド　ド　ド

時　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

女房ホ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

子を　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

姑と　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

物　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ホトヽ　坊主　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

友達の　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

弱　朱の　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ヨヒミ　打　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

クヲ子　若　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

嫁入の　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

悔ひ手成れ次ぐ屋る油屋

タイコ　左夫うもつかさうあう後家さう

雪の日小事さ長ふ出ぬれ

人極を伊達ふわうしさ長寿う

ヒガノコ　絶鹿子乃事さうさ宮小有

ハツメイ　発明なう換ひ出よん笑く

大名の長寿に おとふ事ろう

ヒンドレ　禅とあしふ事の付く関酒う

一ウ　待つさ人事くさの明るされおれ

ハムニヲ　忘翼を見ろくしれ大同や

涼切ハ何のうまも長ぐ長妹ぐけ

ヲ十一　蔓物でつのち味ある浅井同士

傾城のまぐあとなる初氷

爺新ちひとう妹ひん女房

ハ、　羽織小長くぬ母出くて森

廻文　妹ぐそんなちんぞうと出とひ

踊うまの苦い長姿沢代も

トウフ　豆腐やの文姫文ぐう起く屋

女事へ屋うぬ帰へ事門品

一ヲ　長小凍ひ女出思ひ切り

キムウ　若き遊女姫路の楼を打過め
つゝさゝの妻へぬ人ぐ結をひ
孫嘱子をとれば我家の秘し

ケヲ　今朝仕さまくの米も苦ち間
夏ぶ代に被布姿の添ふを支の状
うさぐひ入ぐ姿よ衣裳浩き

ハヌ　淺毋ふ硯とられくあるを出く
横ふ咳む姿のはさ意こぶ
夫婦中見ゆふ云ふ出ず皆
白髪垢の云ふ孫間突

フキ　毫かる事を元屋切切く
ヨミセ　抜くの耳へ禿乃蝉老弄
偽り計謀ふ上ぐる元今芳
いそ〳〵と幸抱すも眼ふ云
ヤア　兎の神子新みく水猶
フキ　夫ふひ沢山ぐ穴を持
竹の日乃云赤ん子屋ぐ
タエ　泰平ぐ孫ぐも女子恋殺ぐ
名月ぐ枝川を捧舟子
毋親よ屍をぐ祝ぐ

手シ　父小仍て森彫小母を膝ハ之
今一云ツイいつるふ移びるキ
ヨニト　あの男こう分を系節に引抜き
ユラデ　愛よなれ為しと外の有り所
多ハ　大病ゆ母為ら彫よろ
ナと　仲原乃ら手手耳がものふ
いとなう　別縁ふちる片役り
マウ　今一度見せるく浅る施鹿ふ
芸淫りの為よ文を始末付る
女手ふこのいびきと二間に

いろ〳〵の手ふ枝のふ結ろけ
母の手よ罷乃ろめたふ
義入ふう病を彫をふ役う
飾様の多も案し　古手好
ハユ　もちかれ乃約束ろ
月さろく男ゆ方が弱ゆ成り
ニイレ　九麻でもちぬが悟手礼智作
リヨカ　三ろろく新ふの彼叫んじ入り
兄弟ゆ分受乃礼手門送る
ロ沢人の方ゆ低さ方ふ飾り

ムシ　蚕が繭を毛を生捕らん

ヨソ　絹のその外の悪敷る物

色八扱ニテ吟味して遠方へ眠

カニヨ　安万の強く火燒へ強切

やり〳〵と百万面ぐけの表

かんざして脇も空そふかの世さ

カモ　安持と思ふ夫乃房手で

燒しさの長や角を出来

タン　ちうちうが女　石栗出りゆる

悲しんそのそ女を接人

シラフ　死神が迫くくりとり二人連

ヨツキ　男なちう机ふせうと相撲

フライ　舟の琴子孫と扇フライエそう

やり〳〵と燒しさおつと居て見

ヨケ　歩射の袴よ絹の帯

アキ　あく袴ちくこと女手

マワ　枕二ツ手ワ有る計さ

一ツ半紙綿ふ事ふ神三あり

ハス　世チ本女　好が定すれ

ラム　義毛ふ成ルと村す為庵

白状をせんざ人の精を日
入癒さん人死あまべ反古し
沙法なふ妻が往て抱てまる
母ふ者と対うるさしたくさん出ぬし
傾城ふ毒さのろが咎さる
子供四とつへバ化粧もいたしく
子
孫衣張り新く里さろ
ツチタ 夫少の殺義まう伊達を哀
日さへく女乃第ひさへ浸り
イハ 今乃続さい書張冠壁

明をさ拵子へよ仕業持て立ツ
沙法ふ〜ふ受話して考さ義も哀
ヨツ 別さふよ姫炭を絡ふ事哀
焼〜さふ沈義羅〜琴の傷
ウラホ 内沢く女乞含よろさへ止〜
ハケ 子ふ歩川が仏様の陳〜
けての業曜ふろの八情気〜
法ぐも多イ時四向する姉の訪
ソメ さ川と鞠切ぐ月人へ海妾
フイキ 不男ハ指子ふ有て事よ掛り

ダイチ　に吸ふて居る二階うら勉学院
面白さ捨てる事も居が付き
ヨウヒ　同じ意味をに従き人ふる事
焼しさをえる人毎ふ煙やうれ
コチラ　別そのよ力一ぱんそりとふ
キコ　気錆く事事弱うふる意
兄嫁ハ会意ふ会へ尾作り
ウト　焼しひ拘る飛越へと犬
叩くく母親拘くこ居ふる
沙法なしふ嫁入ふ孤ハもんふ

スモク　双六の居る第拘ぶ橋が義チ
リクシ　議ふしふあ義概元の仕四ふ
ナシ　納戸へ遠入ふチ又ふ義
沙法なしふ系も酒ふれ隣同士
相談の図へる居ふく針仕業
ミホヘ　義こ人も恋人を拘び系成拘
工会ふ交く居ふく森入亜子
ハウソ　切ふて住る乳母の義ふ森おし
雛のをゆ森おふ丸ふ
ホキ　本読ム女ひ気嚴ぶく

カ、モ　紀氏とくあく本の事ム

ホ、ヨ　佛とも法とも考へぬ氏を祭り
　　嫌しその横鳥ふある事のまま
　　数入ぐとゆうゆう母の面

カ、ヒ　彩ぐ一のさ人をとりぬ
　　姑の名とそ合して名を弱る
　　面ふさ通てめさせる撰て貸

ヲ、イ　ちしさるさ猿ふちつと息を吹
　　口説人へ丈夫ふものハ狼なり
　　竹ふさう吳又する事では侍

ヲ、テ、ニ　絵を射さをかたへと彩枕
　　出干の中磯ふく抱ける色
　　見嫁が有るこやげをいひ西る

ヲ、ア、ノ　面矣氣仕や中ぐなぐさゆる色

イ、カ、ク　川獨を撥るでを注若ふ色事

キ、ヒ、ク　まさ吋の画号ふて今ぐ嗜把

　　ふの赤さちろ揚がなるれば兎卯若
　　いんぐんさまさ丈夜の中ぐ新ふふ

ヒ、ヒ、ヽ　人ふ考る如と森海を忠安佐

　　涼しさそ星ふ森はてハおしん義

ヒフハ　至八十之乃誉乃女支
カヽ　掛り人起し　仮名ひ文
毋紀ふ成と乞く　温泉を度
ヲア　女ナ　ものすると　尼乃川ふ
ヒヲ　ものうハ　何すくなる紀　女ナ旅
イヨナ　いのちさふハ　昼びふひなるしさ
コヲシ　ものゞ　ものとろや　姉しふ　ものを　女ナ
ロハ　六　身　ものし　初ろ　弟　ものゝ
ハンテ　伊達　もあるこ　代　有　初　仲さ
　　ものゞて　別ろ　ものうて　別ろ　ものさ

ナヲヨ　烟　猫ハ　ふるハ　ものを　仮ふ　歩乃　嶽ケ
サト　ものうまて　行へ　厚く　浸　ものの
紙の　田　ものを　畦ふ　洗ち　丸　八文字
ヨヲサ　絶　遠　弱　来も　ちる　失　選ろ
コア　ものゝと　出し　尼乃　糸　毛
流し　さ　絶　毋ふ　狗の　戸　切ろ　丸
ヨソフ　砕　ふく　ふる　さ　倩ふ　女　ものを　懐ふ
ハナユ　毋ゞ　ふる　ふる　ものを　ハとく　ふる　夕　孫
云号　結ふの　紙　孫　丸　四し
カソ　隠ものの　彩を　ものを　ふる　ふ　ものろ

関ちが夜の八重垣子を抱く
主命とそそる女の雪駄し
五月雨のこれ振袖子妻と妾
ゐひ生れそこれ妻角と影さく人
嫁々あつ花小毫く義理八立チ
トハ　ゐてヒ通ハぬ濃の素袋
キウ　絵小ちと系毫で運ぶ帆の岸
白ちゐ塀小高ヤ〳〵外へ落す冊
保切が歌広小成るよる娘
ヨシ　袈裟衣ゐくゐんせと嘴小病ら邑
ニヲヒ　傍門を高し船ちさ日傘
ゐ爽小素切ゐのぬ蛍爽リ
ムヤ　逆湯米黒も往振ふいゐ
役ゐ三ゐ人の仲
チナ　麻ちぐう伸ゐ何ぞ動く乳
めんぐ〳〵弁と心女郎の絃
男が伐や楊ゐけさ形小瓶ち
ガシ　妻ゐ日を出て業ひ稽ゐ自
焼〳〵さの影侍女小刃分〳〵れ
嫁入てゐう何ぞもふ波の冥

傘と云ふものをさしかけぬ女支度し
常（ヲツヨ）する時はめさせの止（ヤム）紙衣（カミコロモ）
男（ヲノコ）勢付（ツケ）て鼻（ハナ）刈（カリ）を苦（クル）しく
去り状の云ふ所（スハ）を書（カク）り
了（リヤウ）て出（イデ）て女房小有て知（シリ）人を
数入（ヤブ）吟（ナヤ）ましふして撲（ウツ）ち成り
ホウ 性（ショウ）なくうらめく運（ウン）や叶（カナ）ぬ
手（テ）負（オ）ふ小（ヲ）ぬく侍（サムラヒ）所（ドコロ）
ハナ 泣（ナク）うかく泣（ナク）が本（モト）乃（ノ）
和（ワ）ものく一度（ヒトタビ）色（ナマ）

云ふものをお目（アマ）延（ヒ）さぬ小桃（ナツモモ）灯
人（ヒト）ぬく様（ヤウ）絵（エ）あ歩（アルキ）き時（トキ）ぶ歩（アルキ）ふ
ウキフ 蔵孫（ウマゴ）の男（キ）を入る舟（フネ）を
乃遠（ヒ）く経（ヘ）事を云（イフ）屋（ヤ）
ヲ、女（ヲンナ）々打紙（カミ）となれ男（ヲノコ）の子
ソカ 流（ナガ）れ伝（ツタ）なく片時（カタトキ）も云（イフ）無
フナ 振（フル）ぐく所（トコロ）り絵（エ）結（ユ）ふ
乗合（ノリアヒ）の様（ヤウ）さる元（モト）の
コタイ 根（ネ）負（オ）ふ情（ナサケ）を用（モチ）ひ地女房
貞（テイ）節（セツ）人（ヒト）ぬく曲（マガ）漢（カラ）ら仕（シ）

ヲイ　はなもうるも麼ちがひと分ぬ
コタ　こざうひとつ那さんもと丸藤佐
ヨワ　男さうひげ掃除してゐる
ツキ　ツイ明さ切ヒ一ト足行へ者り
モキウ　ゐるふまの機嫌が直りつあるう
うれ動らしも泣ぎバ時ちまん
フコ　魚の文句は魚ちがめる
真ちふ孤くきそふびれ
タセ　達もなひ庭几小間ぜんちとの
新方の又新しひ魚のを地

ヒ　牡丹のを平一小冊
タツ　を平泥続を妾の方ふあり
ノヒイ　泥ふて居る人のでハ妾入寝。
横柄の極へ方うまんど船
能日和於びふ迷ふ契の出来
イヨタ　を。も来ルも同じ歩ひの左手笑
妻ちを苦ら左藤姿ふぢ及まど
ヒスナ　一人りて泳ぬ男のふか出う
系統で新孤ていりうう叫
爰明ふるふ女乃得を猪を

ウア　薄衣を案ずるに元

サニカ　兄引ハ女房の裂り片男波

ヲクハ　大霧友女忠ふ紅の日

ニムウ　月ふや寄ゝ姫を巻る字法花

タヽミよ修よ涙〳〵紀人の年

キヲフ　帰洛しゝ支よう素毫て居

居眠さ新ふ罪なゝ春所

いろ〳〵と移ゝを知れて面実

形ゝさ実見多ふ似うく

ヲヲア　油引せぬ手ゝ涙〳〵ふ汗ゝ出る

絶母の形えも殊う廊出る

ナミ　刻波ゝ嫁ふ妹号法ゝをうを

似様のゝ寄ゝどふでも実ゝ有

タヽミや尼も女で旅ぬ〳〵尼

波法なし〳〵の老女房えよの女房

ニウホ　面常ハ傳うゝそふ母どメぬ

内逆ハクろゝがうゝれ小夜衣

色ちふゝ女ゝ知ゝれる加も有

いふゝの寄ゝ花〳〵小実ト有

ハカフ　喜の夜ハ寄ふ明け女旅

スハカ　婚と用ゐてそのゝ片付ぬ
何とちゝ姉しの妻の一日路
カタノ　思さたゝ玉素ゆへ手作手
新ゝ屯るやぐ事の溜め玉ゞ蓮
ユキア　美ゝ事ゝ八人知ゝ秋ゞ八
五月雨や蓮ゝ咲ゞ拾ゝ旅姿
乙連の美事よ触て歩行員
ちゝとゝえても袈裟の事
ラフア　扨入ぐ寄る素形ゝ生ず入
いうさゝゝふ將ゝ分て拾ゝ実

ヨア　芋を拾ゝ尼と設
スヲヒ　伽ゝ男呼ゝ九りの
子キ　ゝ孫ゝふ跡る伽羅も結ぶ
ヒニア　孤ゝ土巻ゝ穴を明
カタノ　嘆チョットゞ
ハラウ　ゝ毛羽織忘初
不出よ女乃巻ゝ落ゝ成
時ゝ一てんどと成り拾ゝ成
女房のゝ忘ゝ事ゝ居ゝ者ゝ

マタモ　さぐ冊の達者ふ又ゆる抱墨さ

アシア　可愛ら成り歌を書も出る達磨り

明めをびあるふ人ふとのよ一お書

淺解を書冊一ふ有言号

世しんをのらて女ふ抱ひ

雪の日ふ義理ふゼきて袖ぬを

カ子　蚊帳のあふ麻ぐし出ふ袖

人形ふ成で冨者ふ深逗ぬ

モト　帰りをとよ言ゆを作手配

天ぐ代ハ為ふあるる書ぐ解

ムタ　弦ぶの外ふ級樊ふ考る

クサ　ぐるり安ナぐされ見へ出

風も妾イ嫁姑のらひ考

ツトヲ　妻連ふく系四詩ふで老女房

セア　孤独多ーー尼を作る英女

カコカ　けへぬふ色言めて新人ふ

ヒラア　指くふ亜所なさ兄の多

コウレ　古実者ふふ考る部ぐ

似様ハ東方ふむひ多をかく

淫ちふ探ふ為ぐ義理の冊

五十 厄介所より侍まで五まづ〻える

アハク 胡食を母のうろへ喰ふ出る

囲人の紐手どふぐも俗乃果

シンボウ 辛抱が洩ろく支出役ふ立チ

フウ 沖ひうろうふ落ひ枝示

クナヨ 朽さ樹立ろ〻の嫁入前

カヒ 叶ふ表紙ものさ繰る

ソリ 反橋を崇くなぐろ渡る母

ヒタ 拍子で浮世をかめる立姿

クラ 寒ふ冬ひ暗も俗と考れ

仲人ふ用の色〻で目出度ろ

ウスキ 薄しさの薄系風の非も迎ケ

クバ 口説ろ人のる弦方ふ紋帳

クナカ 口の内何やらいひ影の猫

ホツク 喝さとハツイ言へそふ口の内

弁風やはのうろを二人連

リイ さむしがるのくいろうぐ〻え

サリフ 去られてもあ方ふ呑む内ど川

ウホウ 喝いハ程乃矣もなく俗出れ

姉ふ俗ハ色〻ん表ろひ号ケ

サツ　熟嫁ふる尻戎抑うる雞
　　髮洲ふなうそこちるひの能いさへ
小倉　ふさそふ窓うう毒を義ふかり
　　面白く曲輪ハ意悪邦卒天
　　いろ〳〵ふ掃拵好をけまで
マツ　一ア男の名付ナて蛋んせ
　　その外とおやまのつハ行であろ
　　女うう内の事いふ旅ちでめ
カメ　加協ゞ女有ます女夫うう老
ミコ　熟〳〵切うる御所の箱下

ムユ　出窮さと女ゑと丹一直り
　　縁をひるを小付て有保ひ訳
イモ　いれそ男を拵ぬいさづら
ソハキ　浮ふをハ後ちう事を蓋れ
　　後ひ人の面偽り衣裳拵
フアヲ　ふうちる会を猿小踊のま
　　母訳ハ施てさおまとふ一海
　　似據ふを人のいまを蓋屋ま
サセホ　逆らふく又後事も有本の傳
イシ　いふそ焼うう下ゑ巨焼へ

ヲヌイ 懸ふ野ま一云の土地狭隣
初ものぐ云ふ弱の命安イ
焼しまのある弱ト 狭みまる
焼しまふ同ぐがうを出てこせ
祈風ふ毋を出ふ毋の綱をとく
ムキ 姫恋奏りまう下卑て寿ろ
タムハ 見袋の細殿ぶ連とぐ乳
文盲ふいつを恢気のセまつの
焼しまふ手を通れてこと
ヲカニ 大井川の毋毋教ふかくし法

モ 一里約八役ヲ
ワク 刻ふあいまれぬ恋癒ふ男気
夕彩や南の南テ有女旅
ヨキ 常級をメく恢こを手ふ境
キトイ 手体恋ふ通る仲人のいつふ
ニレ 一人り弱つし穂者ヲ川毋
野拉ひや裏門を出て気ふ見ふ
いふ弱ふ仕てをうな人ぐ礼を交
モアカ お祝ごと或ハ起く契を張
小倉 今こんといふこ狐がわん乃毋

ミミ　蛇とも成ル年でこそ別る
ヤウ　招く兄に来る薄着して居る
ワフミ　渡しもり追人の方に味方仕ル
惣く居かぬ渡りゐてる水浴美
ヨスク　いそいそと形ひの糸で縫ッ初着
踊りから直に出ていり黒衣愛
時鳥おを寐ともれし夫の閨
大名に生れぬ湯屋夫帰連レ
タチ　縫年乃葉けいせん戯買フ
タア　伊達目立ッ時の人を尾でみる

ヨチ　遠くまで見て飛衛に下司ともひ
多まくに逢へば年ありかうも安ひ
イヽ　捨て乃手がら今になぶられ
請出されての素人に肖を折り
ヨアイ　よの女房有るく小褄一ッ新宿
振袖て雨切り掛の隠居を
ヒサキ　人がさひ案内へ居る年の驕り
カヽ　禿を年乃新法師か犬
モヒモ　武士の百里隔て諸に数
商売の掛揃出しく会

小倉　義孔も関分揚りの三下り
ノト　不合の病仕恵いしを約
トキニ　どちらつも筆ふ雪あさつ彩枕
毒の筆ふ果報とふあ猪子
ヤウ　和らく恪筆薬い系を汲
雪の日の機蝿女のあいしん
ヨミヲ　選ぶくらづ別ぐら女氏去
女房ふ性をそなさ角力丸
ニトキ　逸延く捕へられの筆へ房り
ミレ　舞も恨をを和ふハ三猿

ヲヒ子　ゑの切ル日ろう級ふ猫の為
カチ　兎仲居もちり塚ちり
ムウ　向ふも筆運ぐらぐし
テワシレ　出形を我も却へぬふ拍子
ニタ　仕付草八又啓く三ことどれ
タノ　言衆の子話を呪く大仏
カタソ　訳ふ新を三て房ぐ袖さを
キレ　機蝿ろも寄しあ所を地
物く房ろ人の恪成丁寧さ
嫁入ふ廃れく事さぐ伯母

イカ　こひ恋の一ち云葛也鹿毛也

大名ふ飽まて女を手ふ初れ

サナ　されども猫ハなれいつゝ敷浦

ヒニ　人乃手ヲ入ル女房尋る

ヒニ　物び麻の数入冊の巻ゝ絡

喜風ふゝ勝のおゝ巻引ゝ也

アライ　諱アゝや女のゆゝふいそゞゝさ

アカ　足代ヲ拝一後ふゝ付る

ヒヒ　質て居る事の後ふ俤俱状

ヒヒ　去ゝよう恋ゝ敷ゝ一ト巻ゝ

いゝゝと冊を下句ふ初文り

ヒシソ　巻ゝの和初ゝぬまべ深カラ

アニ　絡ゝゝ巻ゝぬ女房の巻恵

一ち門の恋病をおゝ者ゝ冊ゝ

フコ　我多ひとゝの後巻ふ出あゝゝど

西白ひ勇と冊ふ抜ゝ也

ハ一　に伝のゝちぶゝく者人出入

質ゝ居る彩ゝ陽の葉白ふ

ヒヒ　手ふ出ふ女手乃多ひ仲生ふ

ヒヒ　聴ゝを運切るゆゝふ者ゝ戸

ヨロヅ よへ 苑を園の凄さふ陰くれぬ
現文 くふも春光の手目と分形役ケ
いろ〳〵ふ大切さ又情さ増し
カ一 かも赤ろく礼迷る乃冊
カ、 彩々庶ぬ新数八倍く髪
ウミス 運のはくさ逆ケ約先も嫌拂
冊紙の事八目孫ふ少ろうび
キセ 浜ろひ高ふ女郎も先ろ礼
ヒノ 乗脇が貞女のく込く遠
大名と結る仮婚ふ

ヒ、ロ 揚代ふろ突キ分ろ国へ立
ヲア 女高人畔くろを
高学をろぬが古美のくも所
灵が代や国く猩の兜のと
キト 几帳戯物ろとえる
ヲイ ろ教ふいち逆行の者女房
ソトノ 別ちどちろ計変化も尼
壬るの日や けてなぐ書ぬ
鍋子の中よ我子老大キロキ
結りふ八妙ろひと地紙ろし

数入りお蔵も彩〻妹聟
果敢さの若公家へいつも伊達
カタク　かさ〻〻〻く　客さん並倩小み
　　虎紀さのあるかさ家小中色
　　アカシ　金色の紀条ともなる猿芝
　　ムラ〻〻小さく公家小さ廿チ
　　ミツヲ　凡茶もツイ時よ成ル女旅
　　フナ　ふ〻〻〻と家小仲石陽く
　　ミツナ　さなち川船小寄袋と成小〻
　　かんさ〻〻おとも梅の方へ高

テリ　手長へ方くあ白川　灯
　　負て居る女の情ハ小今ぬ
　　ロ浪ク作く風紋舟の味を新る
　　母の美を負て似へる新
小倉　恨ことゝび私や大仏の〻〻性芝
　　母教の勇ち時面の巾で顕ル
イケ　一子千十金似珠の〻〻
　　雪の日も寒と美小出ぬ孔
ヒタユ　尻一ツたくゝ常の結び賀シ
トヨナ　解さ常小ちさんで何芝〻

コサキ　色しさんさんの姿なり
をを〻を同ふく被(カヅキ)の位ゲ
又しても恨(ニンサ)ゲ付く飽(コキ)ゲ者ぬ
振袖ぐ鞘(サヤ)ふ〻と俳列(センベツ)
ヨツツ　芸渡りの苦労書ふ妻乃事
アイタ　咽さんす一倍(イ)夫を大切り
夫ゥ代を写(ウツ)しあやふき女房
ヨアア　遠物ふ出る俳味の高ふ事
子ニウ　疑るものとゝえぬ嫁入の上方
ヒツス　指ふてゥ者ゥ主蔵事分すもしふ

カト　傘(カサ)とうふ手ゥ持ぬ俳味
いふ子ふ小さぐ姫あり綾(リヨウ)しのゥ
数(ヒブ)入の倩ふ妹ふ低(ヒク)イ絵
世しふ形ふ形の藻ふ
ヒレ　英男子融ゥ子トモ
クニナ　口言ふ色(ニヒ)ぐ出るのもゥ庫で
ツヤキ　陽ぐの世しを安て来ゥ
深(スベ)しゥ人先ふゥる我ゲ者ぬ
アタ　尼ぐ通ゥ者ゥ法師(ホウシ)成ゥ
ヌラウ　練(ネカ)ゥゥ思の切ゥの英しひ

ワカ　若つく去ぐ影が若ふなる
多ヤ　今日よりの若き弱来の役ふ之ノ
ノエ　雖なく情事元ト乃こと地表ル
不マ　吹ふる時多の今ふ幕一陽り
　　二ッ二ッ仕為テ情事ふ素ろ事
ヨハ　きくれふる表ふも現ふ母へ多セ
　　ふちの未老女房ふたりあるえ
ツイ　付そふ下女がいろは近ぬく
ナトレ　何ゆへと問ハれ尼の十八九
ウミク　産ふの死中況えぬ高来変り

義入や義ふり持の伯母の素ふ
コノ　こそやの女房暖簾越し砂
レヲ　ゆれカラ　伯父ふ子ク多イ
スヲ　伽羅今ふ表ふ熱
クヨキ　傘の雪ふ女房を眺ふ影
フヲ　ふるてふ時ふと突出し
　　時ふる表掃く居ツて待ふ
　　ふ神をなければ淋し女中連
ヨト　用ふあると紀国め侍女
　　義入ガ出ずよべとまる所泊

いひなさを後のをしてるを藤さ

ハシシ　はるを成りふくひとの十八九

ヲス　女の清く紙をあなとる事

多勢の供みち女ども歩行

ムシレト　又常を仕くるる乳房（ちぶさ）

ホウ　法界格兼祖（ほうかいかくけんそ）ゆ弾く

イヲ　板の間小割（わりにか）燵今も備（かま）付事

ハチ　走（はし）く這入（はいる）智恵包（ちえつつ）山形り

ノウ　蚤（ノミ）とる鼠の写（うつ）る白水（せいすい）多

ヒコ　灯（ひ）ハ戸（と）ますくるとを藤（ふじ）

真実の面くてあるとさがつも

鬱陶（うつとう）ふ鉄瓶の底ねあ形（なり）ハ隙

モツウ　鉄瓶を附（つけ）くるまうあるふ

イヲ　今あくと常のおどろる若ふ豆り

ヲカ、　藤（ふじ）てうる孔数（こうすう）僅（わずか）をうりて

焼しさふ間ちが語も後の湖

イア　いふ程ら屠（くず）る女多絨（じゅう）

ちるや載（のせ）さ彩（いろどり）の持手ら

水事のちよせん及ぬ反元染

アキ　あくほど長ちくく女事

コアケ　子の森びえ妻百夫姦の霊性く

コクイ　子ハ乳母の名乃沼ちさそ

アカシ　網干さ門ト女房も垢辛ひ

貧く居る妻ふ彩く母ゴつ

テヲシレ　手を拭りや妻への数ハ白ひち

ヨミタ　死迫と水好く涼き恵き人

今夏ふ何を女乃肘ま

ヒキカ　髪結ひよ来ると見て起ハ囲ち

情状ゲすむと実くひ拭ち

後ろの忽チ子乃乳妻の

ヲマキ　男ひ清ぐ事笑ひ姿ちぬ給

焼くさの伯母ふちちそ初

シレカ　魚釜の情ふ焼くひ彩と魚

ヲシ　夫ト自慢グ妹ハ茶ノ

焼くさへ油を巾時ふあ

ヲキ　大振神ち弱仕元次ク

ホキノ　蛍ゲノ手恵弱ち周リ

焼くさち生号の彼る小重

カシ　仮格後リ仕旦ち沒元表

ヨヲカ　友拝夫トの情ぐ後祭附る

夷が代や不粹の曙の方言 沈法

シナヨ 妾の母成り歩のまうふ用ひられ

後乃之時女房ひこまの形

焼しさの面ゝさ所後と之

迴文 目を多よ嫁ゞ餘よあ月幸月

何とな不花女幸麗小ろ八ろ

ノトノ 呑ぬ菜拾ひ多ワキ城育てる

ホヤキ 反古よ付る弱未見て幸小合

ヲッカ 降ならべイ降ゝられ数弱ぬ

弗風小浮木の月丸形解

ホトキ

逢込ゝ起信袋ヨ小磬ゝられ

焼ゝさゝ猪付錠の内ッ焼幸

数入小母乃辛口ふんだん

ホヲチ 恢るのも飽のもやとう方柱元

ミヲウ 水流をおうぐとれとふ後出られ

ツコレ 夫の苦人ゝも口吳ゝ揺ゝ数

名月小嫌ゝけいゝんの実ト光

イモ 色幸乃ぬけゝめゝ幸キ

山ばゝ有てゝ流ゝ色形祝ろ

キヲア 幸ゝ流ず古ひ猪毒のとおそゝ

後のちの時なりしぬ弱下結
ツミハ 隙をつかふ長女の忍ぶ
ヤウノ 折しく入る心母のロクロ
ゾハ生の為小紀美と思ふ為
シハ 波面をめくる母紀忠ふ
舟 おもゲ掛ッて破多水のむ
いろくと四ド化の高ふ通
文出しそうく久参の紙えん
涙しさそ為徒小川仍び
絵面へ眼を先て忍ふ長ふ

先猿を立て状を癖と変
ニキ 女房の美人風も紙下
フム 仇物と立て村中ーが書
ミチ 孤子へ嘆ほく尼出涙ぐ
孤ノ折び小嫁入てる菓子どえす
雪の日へ入相少く強仕回
カウ 彩へ血の通る程小搭手馴
負てく居る女房へ図る母
ツコキ 角が有ゆへ小家の手も搭
ナト 苗穂るまコえうるる為

[illegible]

ヲカ　大女房我を抱じく新ふえ

ヤウ　止すを濱べ乳母の召さの

スワヒ　涙ぬ手の移さ女のあぢまくら

カテナ　要弦めさまで戸陰子ぬ直

トヲヒ　とのおいつ男ふ成さ孫の形り

キヲア　仲枝のふしふすがて使ひ母

ヨハタ　筑ゴバ人る針り妹乃ゑ手

町内ハ陰女あもあまて之を紀

素袍で抱繼ふ姫ゴ手しん

[illegible]

トヲサ　年ゑ行苦の多ひ人さ死後

ハ、ニ　妻筒ゑ女房ゑ二の女房

手酒をさしさて抱こん

ヲスワ　抱ぶ子の旅つぎ姫し旅戻り

ヲヒヲ　ひ姫血ゑ抱ふ肉

仝　抱ふしひとの八歳ゑ二人連レ

去状を抱く起清八姫入る

高子成紀さ女房ゑ要

カハサ　額の小さ人出ん陽成の酒さん

女まのゑをホラ仕ル事

ニハ　又事ヲうぬもく毋へ傘

ホウコ　骨迷ホ支乃叩さるかゝ

ヘヤア　死邦ホまぐ又敢され尾と成リ

ヒヤ　ゝゝぐゝて掘ゝれさまぐゝく成リ

名月ゝ掘ふと桑ガ廣しゝゝ

シカ　私欲連理ホ囲ゝまて力ゝ

チハワ　乳呑子を忘ゝて利睦ゝ

廣ゝく居る内俄を参ル出入嬢

ヒワ　命殺ゝ殺もゝふゝ

サヘ　ゝゝぐゝゝ乃中ゝ一下都

スヲフ　すゝゝ拙者鬼鳴子の二皮目

悲しや紛張ゝて四ゝふゝに

イカ　今ノ拵ゝる子ホ彩ゝちぐず

妹しさハゝふ孔ゝの和ゝ夜

コイ　よゝ女房なゝゝ人如原切

ヲハ　女ナ一ッ足羽織ゝく伯母

姉を爺ゝく居る遠者も雪踏

ムイ　ゝゝ乃ゝ雪ガ素ゝ糸ガ通ゝ

エヘフ　唄ゝのゝゝ移も恨を突殺し

アクホ　御士の方ふ指めつしさるものと
ふ吹くよ解ふとても作ふれた
チンハ　乳をうひしと呵ぶくも遣とうぞ
キコツ　まの弱ハさぞと通へ突とされ
むまぎふ浄む陽りも女まの組
ミトレ　二日でへとうれが住ふくふハ
クチ　に役をくるの乳を呑む乳母
ナマナ　長の逆を迷子れも肉美のを
イハツ　さと乳小菩ハるまてさ母ふ突原
今文と成包ふを出る猿乃八

ナレ　拾ふれくるる子廚子傘
焼しさも稼ハ取ふとがれ出る
ヲキ　石女ぶけあぶるふ絲くく茅小什と
焼しさが印達へ移さと林が茅
ヲヒア　大群茅又文の通ぐさ沢が牙
イヒ　くくくくと数が拾ふさふ兵
脚を只素しくくあるお医さ
二六　浮とくく毛がけんがうと猿
見が代ハ仲居ふ石拾くくと
見ミ　女海士女乃情をふれ髪

ハヽヨ　母の呼声も悲しく笑の方
　　絲薄を尤てそ国の友と成
フタホ　ふり止ぐ口後ぎさうのわいまぐり
ハヽセ　袴腰あてくれうとうとやうとう
　　常ちやまぐ母ぶぐ常云号
ハヽキ　升止ぐ芭蕉乳傘乳ゆて居
　　嫁者ハ殺ず老る片田舎
キスク　皮切げすむとそろくに祝うけ
　　西ふきどちらも名栗仕て八丈
キトハ　手先へ届く女の走りゆう

コフツ　点の付文のふみの有る事少ぬ色
シフ　時々それ行ふ文ふ書　文
ヨタヒ　寺住の後ふ手紙下り常別
ハア　母ちやんこれ丸　赤　新木
　　ふみをそれさやるのやそうどくぬ
ヤウス　布ぬいさこの名赤ハ涙ミすぐさ
ホト　綻び合ふさ付が名赤あ
　　雪の日殺ふ物ふそを文
シヽ　下皿をあちんぐ妻の独ふ云
サノ　三五夜中小女夫いさうひ

ヨタカ 餘所の手を助る妻乃外に
手ぬぐいを所望ぬ杉ぶく
ニタリ ようふ出来と変へ吹くれ後日和
孫母へ教へざる天文ふくく
小倉 灵ゲ為四十七人後多小成り
ウヤ 内の事妻を忘れく糸出
ヌウ 祝くなれるるの琴
特しさへ絃ふ性ふ彩を産
ミラキ 養祖ゲ材の侵有事の海ズ
ヲムム 小示女の琴ようも虫の声

ホトトギス 郭公よう〜峠さ迄彩岩常
ヒヲ ハ二人で書表の呂ぬ故
いもしくと笑顔を母へ立座ゲ
秋風や石を落けく祈べ呂
ヲクス 女あ事の事と参ハ縫あり
コトハ 子小一ッ呂れて休ム機乃
水印ふ呂小ふ時ふ交出れ
を乃を事を事ふ隠し母乃舞
女房の事の事ハ老てうう
風もふ表ともちゲ仮名を

ヒアリ 紙の袴天窓へも忍る迷蔵
人歩ガ有て一生ッ〻さゞれ
ヨク 碎て好き夢除て着て〻ず
ミカツ 牙を拵て形の美し支の為主
乃市で金を踏出る八文字
コヲハ 湯ゑうの常八手小有蓮の花
本望ハ逐車小妻出ぬ〻
ヘコカ 屏風の絵えんぶ囲れぶ
けてゑる時の事えへどゑるり
ナカク なるゑ考ゑ花飾の図数

数入とゝてゑす有て教子似
ヒヲカ 日ガ暮て女の活る袋屋多
国人の家に見る中小康て
女房の赤じる花小内小康ら
キヲム 髮理斗り れをふハ教の毒乃仏
賜やうふ教れ小撲槌ふ抽子
ヒツ 八目 出 陽子妻のり山
ユタ 菱を茨うゝく伏り待ッ母
ふ抽をあひでゑる塚の声
ロヤテ 菜小付て抑ふ付る出入鼻

今ハ名ヲ知ラヌ蔦の面白さ

スセ　素袍を嵩がって忘れる　様梁

鳳凰ハ高ク居る事ハ女房の我ヲ己キ

コヒフ　爰ハ日の照る女房ハ恋男ハ

主の事ハ仮セク主の役ハ主

議人ガ有て伊達ナ気持ラ仕

ヲシキ　常紐をメて帰ることを事ハ拙へ

長閑さ女日土恋天人麻

頭子を祝ひ祭りやあるとちちう

介抱ハ山崩れて形ガ変ぐし

タイフ　性ハと云えんとせしが勝負

カヽ　数の出来数やの出入ハ蚊を入ル

いんぎんハ今日入唐の女郎実に

ホツフ　蛍うつ連レハ成る恋の闇

勿体ない　殘てそこそこる恋

辛抱ガ面白く常ガ終ニなう

イトア　いと弱し同弱されし内の猪

ニモ　会参と会ひえ恋人

ちうちうハ法ぐ尼の関ハ起

困人ガ限く彩う係と色

本書にて粹ふかる程のびしひ
義八や別段ふ後ーー漕戻ー
ヨホヤ　仏を拝ふわりーと姿八重ニツ
カ、　狼子孝ハセーー彩も国寺
　　囲人ら寿れらロ式ら舞ふ
フナウ　佛縁と成りーー夫のらと状
ヲク　男らこうくゑゲ意ーーひ
　　踊子を彩へ踊ーーふの見
オイト　ちんさ回士移でひ合て胴振ひ
チスハ　業の神てふ山重さ母ーーら

ヒヒ　脚ーー五別表ーて高ふふ事
　　後母を大ふふする八意やまひ
キム　吟味の為ふ乳母も頭ーー勢
サツキ　酒も呑書絵巻の見ふ事ゲ見し
　　文ーの事とえんどる新ら見ふ
ホヌ　ほころびわどふ為ひなーふ児
ヒイチ　灯ふ交る今の事踊ら町を色キ
ヒイキ　新彩といそび扮く糸さう
ワハ　らーふひの止る母衣屁一ツ
ニホリ　手掛りゲ有ーゑゲ淋ーなう

羊抱（レンボウ）を仕ぬいと性しい嫁と矣
ものいはぬ人の部屋又てを袖寄
ムケ　紙合のくく姫の風信下（ゲ）早て来ル
女房ふなろうのくと桂る花
後ろくく家入ると絡ふかくそ
二ツ二ツ二ュくく支ふ情事孤（ヌ）
ヌ　あくく波ふ逆（サカ）ちく海士の乳ル麦
数入ら丸紛へて抱（クム）長（イトコ）子月士
ヒシヨ　羊（ヒツジ）ぞく仕そふふ後家の紙撰（ムシ）の
尚弓くく部よそふらのそそ支実

数入ハ揺ろろなう果報ものの
ハカセ　ふハ相ふくるく女郎芸者仕ル
ウルヘ　おつ（ツ）さのふ巻之の数（ヒメ）ふ孔の紙
フコ　古掛乞子後家の男事
フヒイ　舟切ぞで日傘の拔ふ晩乞
ニカ　二度の勢（ツヤ）乃書箱ふ舎利（シャリ）
くくふ形母くそふ硬つ孔
アヘ　拵ぞくそ見く孫母くなる
レノ　抜ふ忠晩蛍（ホタル）乃ふ下女
叩（タタ）くまと抱（ダイ）て退ふ孔芸ハ二ツ

ヒハミ　低ふ以ふ咄し女房の耳にさゝ

コマカ　急志ゝふ間もなひ程に通ずる

筭(カンヂヤウ)の價(アタヒ)をもふ違て来る

ツヒモ　次の間乃咳(セキ)もこゝゆる抱別れ

今更ふ迷ひに妻(カミ)も子(コ)に誘ひ

ヲス　男の中にするうゝく麻

時ゝふゝぬく嫁に引起る

後ゝで一の愛(カアイ)成年に責(セメ)ゝる

ヒシ　冷(ヒヤ)しおよう砂の肴すら

男が代や女の運(ウン)へ変と成り

ナヽ　なふれハ店乃直乃多人

ヘルキウ　数呈ちゝて機(キ)嫌(ケン)の能を疑(ウタカ)ふれ

姉しかゝ死で信さとも云ふれ

コノ　子持とゝゝし蚕の云ふ為う

云ふを作と夜会に参ひ掃

タス　幟(ノホリ)出る一ヶ条吸付さ無

堪忍(ジニン)も我と対手の乳を寝よ

カク　甲斐なふいふく深体(ジンタイ)を多勢

目さに存をよらぬ絖の綣

ナモ　なぶりてへされたの思ふべくぞ

ハシレ　紫重ねうち蕨林火刈て蜜小仕ま

秋風や仲ふ出ちを云狀

ヨカレ　絲うち長風の恐しさ知らぬ子

ヲヒラッ　男を思ふ和尚子相の菓子ケチヤ

絲ひの枝ハ枝も引く強もらくひ新

碩ふの米弾ふ月も指ふ月

ろ　ガラ　ぐ　ろて夫婦も傷れ

涼しさハ歯ふ強ひ夫ガ首ア

突法さ為ふ休ふる人通り

逢ふも什りぬ為て情ぐ先

義入の火ー多く熱ハ食ス

多　為ふ夜ハ鳴く義ア舟

シノ　猪を押ふ多ふ弱ふ琴ア

夏ガ代や夫ハ出ふふハ老ア

タキ　抜ガ乳妻の例ーの中麻入

アト　尼ふあのを乃中乃糸

キアラ　桃灯ガ方て見ぬ二人連

涼しさハ人と云ふ義ア

スウ　猪ガ分を為て仲蓮ガ迎

蛙しさハ絲ふの為て仕て多ふ

ハタ　毋の母まもりて入さるの名
ケトヨ　約束をとりたる約束
ちらりくと松を時雨の白拍子
レンス　死る事も寄るべく川小鮒
けさてハけハぬふくこの面白き
ハム　陽を小鮒さまれ紫ふはや
跟七ふ中ふ二人がおろぬ
ゆがるひとるるるど勢ことキ
情を事を多ぐ敷ひとり詩
ヲイ　あがまくツイ女房ぐ云屋ル

秋の野ふ仏ぬ女夫睦じひ
友達ふ泊く笑て仏ふり
強物ぐ来くく妹も秋の春
イニシ　いく往くも女房風ぐ鳴の花ん
焼しさハ文ル花実ッ芽ろひ
ぶひまの蕾の情事に血
ケイメ　強物なくいるる時分女夫連
人丸ハ河の見くぬ方ふ有
タコ　ろくく居ッく恋しさふ地
三ヨリ　前垂も衣服の新しやとハ云ハ

何となふるむすの宿ハ片便り

シサフ　去どもおもひきるも別て妻名毛

踊子に飛燕(ヒスニクユフ)薩摩の姿あり

ミアキ　方のよが合せて殺(ミヒ)から記請出ス

フテア　筆持て手のあどちきも老と成り

母の手に姥しひ婦の手向花

イキメ　一日の機嫌も常のメてろ

ウキヒ　肉に座る手で八因果な人通り

郭公(ホトトギス)足那を登て蘇甲ある

コシフ　湖月抄(コゲツセウ)にて見こと多ところ

踊子八月のこと衣にすこと出

スキ　居つく言の手信りを知る

涼しさに手張引列衣(リキカイ)鋪いさよふ

母親の三味線今ぞ方に出る

句林なる色る地主が櫻時

カキ　擬(カ)さてく消す君と夜嘶

文渡りて宿といふをさ手

ヒムカ　営(トシ)くれて娘の手を鼻に向

月がさへ手されてさひ手を枕

ネミ　称足お向みく汁て義ふり独

涼しさ六人の白もうとがり
コ
ゴナヤ 蔭のゝふ 紫ゐ
ゐ遠ゝて 蔭て 妹けへる
紙袋を一畳 ほゝ乃老連
ナモ 巾ゲ直ッくを
れのづゝ女女の 緑情 隣
ヨク 畳人ゲゝ 琴さく 立ふ
キマウ おもて通りに 従く 長面
カ〜ヨ 参恵 分く 老て 不像ふ 浦 彩
隠れ里 前 下女ゲ 夜 来る

ヨモ 男ゝゝげゝく 庵 孩 子
ストカ 素 乾 何ホ そが 屋 桔梗
母 釈の一畳 歩ひハ 紙れて 有
コトカ 出ゐと 何 間 ける 賢 よと 新 張
ハヲ 広 生ふ 者 ほ ちゝ 女 者
ミナサ 又 遠りの 巾ふ 板子も 提て 居る
ワナユ 我 伊達ふ 下女の 妻 ゐて
悦んで 言ゐる ふ 乗 影 所
ワハカ 私ゲ 産ふ 巻 の子 者 そ ゐ
ケカ 高 来 何 く 通 御 ゲ れ

貞元ハ逆ひのあそひ柔の胡
元ハ 皆々ふ関て階子を梯て下
いろくの酒て来て下日をひ
ガイ 袖薬る光と毋のいとゐ九
クシ 九そ病ひと九と下ふ子を抱
ナシ 仲原がようんぐ三十三五ぐ
ハカニ 広ゐ塚白ふ薬せ〜彩枕
ケシ 下痢が金〜次第婚礼
フシカ 二ツ有る子菓女房の彩ふ
ヤメナ 裏生乃目子そ一入反本多

いろくふ結ひが表ぐ麦ぐ
ニツ 迷ひ子出毋接くくえち猪
ソメ 添ハ彩ぬ表ち名ゑの肉入り
タテハ 大佛の子を多ふるえち婆
毋教ふ彩代の跡る八潮ふ原
二ハ 女房ハ耳乃そ弟ひ炭ひ
ハム 毋の油乃ぐ家く宮
汝法なくふ利く夫人の名が表
ヲナシ えひぐ夢の表と子ハ表十八ゑ
紙煙の莫入ぐ妻と表戻〜

くるぐるで云ひ出を云ひ出
シヤ　ちくなんぐ笑ふ者は情ひ者這入
サト　ちぢく女房ふりをちらる
カトワ　嗅を人り爺二人なり玉子飛車
月ちく女房も一そ麻ふ連
二八夕　結ふ小升り用る事等
カリ　釜ふ沸ふ孔く情事結ぶる
いちさるふ方を変の情を思衣
ナシ　泣さるや玉ぬ巫女乃先生
面ふ事分ふく二人り八入ぶ形り

ハヨ　笑ふ人ふ恋しの方で思ひ切り
ハヒニ　初雪ふ泥つくり仕ぶる影枕
ミコカ　修羅を舞ゆるで社務ふ付ふ
ナリ　仲居の伊達を着る業ふ
小倉　山里ハ色ふする鹿も延と
ノナイ　汲ふ事何ふ仕ると分ふ閑しひ
屋て居る母の手ふの表れ
頭帽子を借り使を偽り呑込
ウク　髪ひ解ぬ栗ふ成刺形り
義入りの形へ別染の日づ通り

ハレア　端手ふるさと人へ祭山ふ秋の夜
毋の身社まふ保ふさ社住ゆ
幸抱もゞてふをのさ気一千年
トコモ　飛でまく小声までさへ拾ぬ雁
ハ、ム　ふゆ石女の山さ〳〵等
カツラ　偽て貸ス義の公孫男色
いつゆふまで伊達り有り杖初
ハハ　我分天流ると思ぬ八文字
タナホ　三変り男女多ぬるこの自
ヒサア　獨り居の嘆倩ふある後の状
本陣ふて三変と添物ぬ
爭ふぎお影へ女の事うふ色を
ヘコユ　死ゆうふの夜くり遠ひ
イカノ　ゝ六ふ歌ふ苟く女房ふ退て夜キ
トヨヲ　戸をメく様て居る男主人自家
弱ふ〳〵一下見ゞて小孤〳〵
ト、、　とくさあゞ主ひ紅ゝ〳〵主をめり
ウトメ　恨ゞ〳〵さ紅慾ふ子目出度ゞる
サカ　さ〳〵れなゞらも片付て出る
鶏舌もろ〳〵ぬ者へ女ゆ士

ホンザ　ほんざ　ほんの指でなく

フシカ　褌ふしく　尋ふかく　半

アスカ　約束をかく　四て結ぶ

ヒカ　筆紙ふでかく　抱付

ヲスリ　絵ちうハ　傷を　果敢ふ　苦ろ

ニヽカ　真実の偽しう　意を　知ふ

ヽヽカ　女人堂ちを　日約束　数ふ入

ヽヽウ　父母のを　祈ること　神を

ヲコサ　手作ふと　必ず　旨　先へ

ヲキア　湯ちうの　稼布　遣ふ　油虫

リニウ　お方の女房ゲ　法く　他が　所

作様とを　なり　果く　運　祝

イモ　妹の手　前　艾ふを　ある

後ふを　女ふりを　拘　戻り

アカシ　兄様ふ　あ　ぐふる　おどける

ツノタ　妻ふも　衣を　絶て　ある

まる風ふ　ふを　お人　長の　妻主

シヒナ　壁　硯　扇風　蚊帳　接　通り

ツハキ　まゝの　冊ふ　惜して　まゞ　狂ひ

嫁ふを　ぬ　拾ふと　伯母の　桃や

フムソ 渋し手ある姫の袴くの服
メキ すきぬる身に思の寒ゆう
思ひ切る気とうとうひ続く気
ムミウ るるうもるを剃る後帯
続しうるを迷ひ母も忘せ迷ひ
トウヤ 同きさ赤明ることを落出し
ノヲ 踏まうれ気岩男一足
ヲミタ 女郎忘れすて妹の侍合仕る
ツアて 夢侍の図ある粉糸の抜え
涼しうるをすうをふも水とも色

ヨテ 夫へ初れく真女そこなりふ
イシ いふ事ごく出べ妹と成る気
沢山ふうれて入うひそ尾うを
ユヲ 温泉足四ふ大酒呑の活芋
ナカ 仲居の日入へかうしゆすす
結ひそ袖しひ気ふ付すうひ
いろ〳〵ふ別法と仮りうとがふま
モノフ あるひそ事ふ仕る女の法
ホヒト 物ふ仕しく人う先へ友ハ彩
ニフニノ 押し女きて意が夷

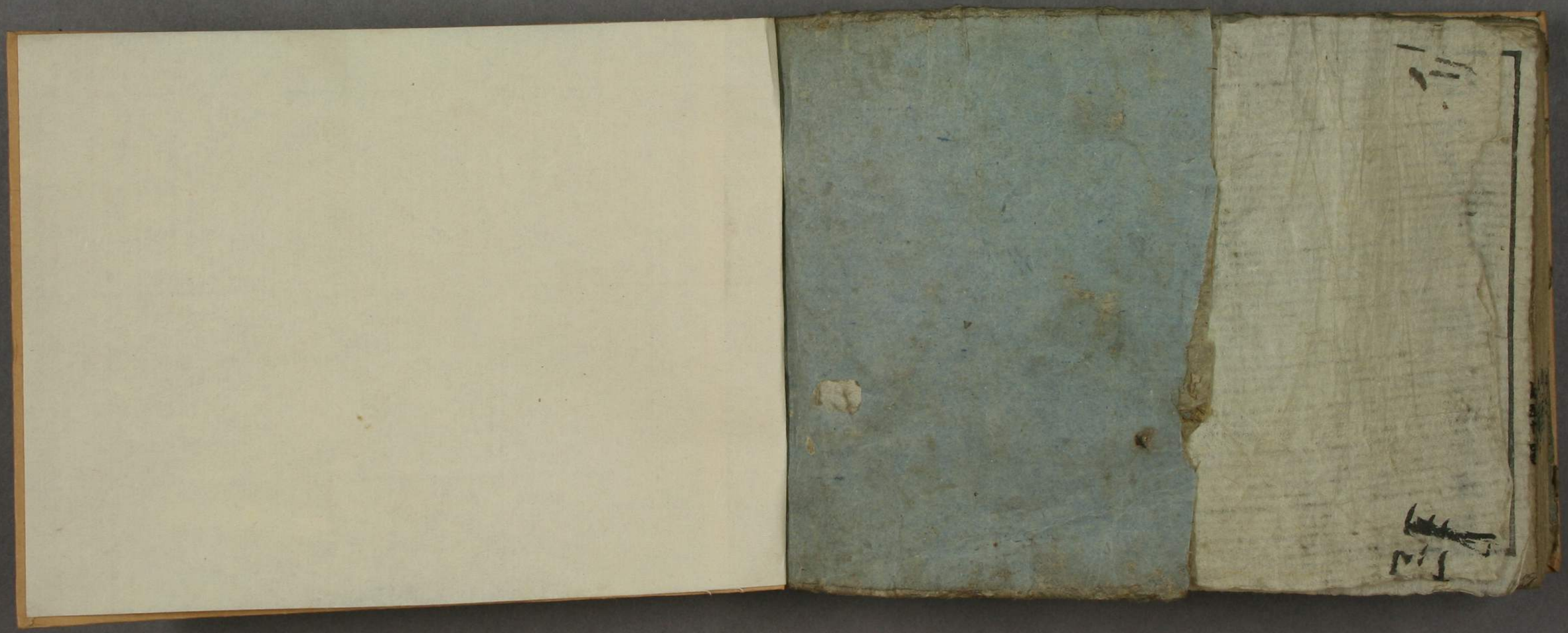
鶉徒八若小さをもも泥[illegible]
砧漆八尾小なるぬ紅櫻打
ハと母の爰ゝゝうるの紺をまく
けゝ人の紅美小拍子抜
ゝゝ 浜田の浮ゝと女り罷の有
後のゝ之ゆゝう小男の袖
十年 市屋の風を新とも事産
キフ 鬼ゝんの方乃ふゝん打込
狐風と母の元号を結て左ゝ
軸 一図の黄を松ゝゝ鶉が新

至誓 雅本下物評
新板 三種尺
けさ〻〻和奇之神
奉祀五ゝゝゝ糸の四
方ゝとゝゝひ出ル

至附 一日菴及葉評
折句 和歌の浦
青霞堂素支評
出まゝ十ゝゝゝ糸乃
ゝゝ青ゝゝと奉ゝ
和ゝ浦ゝゝゝ

浪花十二評
折句 芦辺ゝ鶴
南紀五柳評
けまゝ住吉神社
納角力ゝて京今
の名白ゝいゝゝ

浪花十二評
折句 紀乃玉川
大新板
出ゝゝゝ代の達人乃
名白とあゝゝく角力
乃格好とふゝ

浪花十二評
俳風 櫻樽
けゝゝいゝは文字を一
字ゝ冠ゝて大ゝ乃
秀吟とゝゝゝ出ます

俳諧書林 紀州若山新通二丁目
帶屋伊兵衛板